

## フィリピン聾教育事情視察報告

筑波技術短期大学・障害者高等教育センター<sup>1)</sup> 筑波技術短期大学・聴覚部<sup>2)</sup>

松藤みどり<sup>1)</sup> 萩田秋雄<sup>2)</sup> 長谷川洋<sup>2)</sup> 大塚和彦<sup>2)</sup>

**要旨：**2004年1月にフィリピンのマニラ地区にある3つの高等教育機関ならびに国立フィリピン聾学校および教育省を視察した。マニラ地区には国立フィリピン聾学校ならびに高等教育を担当する聴覚障害者のための教育機関が4校ある。筆者らが視察した教育機関について概要や印象を述べ、フィリピンにおける聴覚障害者教育について情報を提供する。

**キーワード：**フィリピン、国際交流、PEN インターナショナル

### 1. はじめに

筑波技術短期大学は世界各地の聾者のための高等教育機関との国際交流を進めてきた。近年は特に、中国・韓国・タイ・フィリピンなどのアジア近隣諸国との関係を強化している。中でもフィリピンは、日本と同じ島国であり、英語の通じる国として交流しやすい相手国である。PEN インターナショナルの活動を通じてフィリピンにも聴覚障害者のための高等教育機関が存在することを知り、さらに現地の日本人を介して、メトロ・マニラと呼ばれる首都圏には複数の高等教育機関があることがわかった。

2006年に日本で開催されるアジア太平洋地域聾問題会議を控え、筆者らはフィリピンの実情を視察するとともに、この会議への参加を呼びかけることを目的として2004年1月にメトロ・マニラにある3つの高等教育機関(CAP カレジ、MCCID、CSB)ならびに国立フィリピン聾学校および教育省を次のような日程で視察した。ここにその知見を報告する。

日程：2004年1月26日 CAP カレジ視察

27日 MCCID 視察

28日 CSB 視察

29日 フィリピン聾学校、教育省視察

### 2. フィリピンの教育と言語事情

フィリピン共和国 (Republic of the Philippines) は7100余の島からなり、多数の方言をもつ。面積は30万 km<sup>2</sup>(日本の8割)、人口約8500万人(日本の8割)、民族はマレー系が90%を占め、他に中国系、スペイン系、および少数民族がいる。宗教はカトリック83%、プロテスタント9%、合わせて90%以上がキリスト教徒であり、イスラム教徒が5%いる。米西戦争のちアメリカによってもたらされた英語は、公用語の一つとされ、共通語として普及した。多くのフィリピン人は小学校から現地語と英語の2言語で教育を受けて育つ。

フィリピンの初等教育は6歳から6年間無償の義務教育であるが、衣服、交通費、昼食代などは自己負担となることや、2言語政策が児童の負担になることなどから小学校でも中途退学者は多い。また、教室や施設の不足のため、授業は午前の部と午後の部(例：6時から正午までと12時半から6時半まで)の2部に分けて行うところも多く、制服を着た小学生が夜の街中を歩いている姿には驚かされた。中等教育は12歳から4年間で、日本の中学・高校を合わせた6年より2年短い。私立校の数が公立校の数を上回り、進学率はおよそ60%である。社会、体育、保健、音楽はフィリピン語で、英語、理科、数学、技術・家庭、工学は英語で授業が行われるのが一般的である。

高等教育は16歳から始まり、大学と専門学校で行われる。大学の修了年限は専攻により異なり、医学部9年、法学部8年、工学・薬学部が5年、その他は4年である。大学、専門学校ともに数は1000校を上回り、両方で2400校ほどある。筆者らが訪問した機関のように非常に小規模のものも含まれている。高等教育への進学率は30%近い。

フィリピンは女性の地位や教育水準の高さでも東南アジア随一といわれ、女性の教員数は男性を上回り、国家公務員にも女性が多く、女性管理者も多いのが特徴である。確かに筆者らが面会した要職の方々も、視察した授業の担当者も皆女性であった。

1987年に制定された憲法では、フィリピン語(マニラ付近の現地語であるタガログ語を核にした言語)が国語と定められたが、公用語はフィリピン語と英語の二つであり、高等教育を受けた人たちは不自由なく英語を使っている。出版物はいまだに英語によるものが圧倒的に多く、大学の理系科目は主として英語で教授される。立ち寄った本屋に並べられている本も9割以上が英語であった。将来は公用語をフィリピン語だけにすることが目標として掲げられているが、現段階でフィリピン語は、い

わば生活言語にとどまっているように見受けられた。

### 3. フィリピンの聾教育：初等・中等教育段階

#### 3. 1 聾学校

フィリピンの聾教育は1907年のフィリピン盲聾学校の設立に始まる。のちにフィリピン聾学校となるその聾部門は、聾の両親をもつアメリカ人によって設立され、50年間フィリピンで唯一の聾教育機関であった。現在も幼少時から英語で教育がなされている。

フィリピン聾学校の創設者は手話法で訓練を受けていたが、学校は口話法に力を入れた。アメリカから口話法の訓練を受けた教師が赴任してきてフィリピン人の教師に口話による指導法を伝授したり、フィリピン人教師がアメリカに研修を受けに出向いたりするなど、アメリカ主導の口話教育が推進された。

日本軍の占領時代に、校舎には日本軍の総司令部が置かれ、学校は閉鎖された。1946年に再開されたとき初めてフィリピン人が校長に就任した。1963年に聾学校と盲学校は分離した。現在の校長、Yolanda Caplong 博士は、筑波大学大学院における長期研修のさい、設立当初の筑波技術短期大学を視察したとのことであった。

現在、国立フィリピン聾学校（Philippine School for the Deaf）には約750人の生徒が在籍し、幼児（3歳から）・初等（6年間）・中等（4年間）教育を受けている。

普通教育と同じカリキュラムを基本に、特別科目の設定（言語、発声、聴能訓練、リズム、手話）、履修内容の簡素化、職業コースの付設、特定科目に関する授業時数増加などの調整を加えて導入している。高等教育機関に進学しない生徒のための職業教育では、コンピュータ技術、衣類販売、美容術、グラフィック・アーツ、食品販売、家具製作、電気、金属加工のコースがあり、就職状況は他の特殊学校卒業生に比して良好である。就職せずに、裁縫店、喫茶店、食料品店などを開いて自営する

場合もある。卒業後のアフターケアも行われている。

#### 3. 2 統合教育

フィリピン教育省は統合教育を推進しており、現在、公教育としての聾学校は寄宿舎をもつフィリピン聾学校のみである。聾児は他の障害児とともに全国にある147の特殊教育センター（1994年の資料では35ヵ所であった）、あるいは特殊教育プログラムをもつ1504の普通校（1994年の資料では12校）に属している。この他に聾学校を含む18の私立の特殊学校で聾の子供が教育を受けている。教育省は特別なニーズをもつ子供の数を地区ごとに詳細に把握しており、2002～2003年の資料によれば、聴覚障害をもつ児童生徒の総数は全国で9122人であり、そのうちの小学生7693人が公立、681人が私立の教育機関に属している。602人の中学生が公立の教育機関に、146人が公立ならびに私立の大学準備教育機関に属している。

メトロ・マニラの地区にはフィリピン聾学校も含めて21の公立の教育機関（小学校、特殊学校、特殊教育センター）、ならびに11の私立の教育機関があり、口話法を推進する聾学校、Philippine Institute for the Deaf もある。

1997年に一般校に特殊教育プログラムを設置することが定められて以来、聾者の学ぶ場は聾学校から一般校へ拡大した。聴者と机を並べて学習するだけでなく、聾者の特別クラスが設けられることも増えた。

教育省は特別なニーズのある子供に11段階の教育プランを定めており、特殊学校に就学することは8ないし9の低い段階とみなされている。

#### 3. 3 英語対応手話とフィリピン手話

口話教育を続けてきたフィリピン聾学校は、近年、英語の音声に沿って表出されるアメリカ式英語対応手話を取り入れ、幼少時から手話を用いた教育が行われる



図1 フィリピン聾学校小学部の授業



図2 フィリピン聾学校の英文法の授業

ようになった。一方、視察した高等教育機関では、自然言語であるフィリピン手話を用いた英語の再教育が、音声を一切用いずに行われていた。フィリピン手話はアメリカ手話（ASL）の影響を強く受け、語彙も文法も非常に良く似た言語であるが、フィリピン聾者は自国の手話に誇りを持ち、アメリカ手話とは一線を画す姿勢が感じられた。

#### 4. 聾者のための高等教育

メトロ・マニラには、デラサール大学内のセント・ベニルデ・カレッジ（CSB）、独立した教育機関としてミリアム・カレッジ、CAP カレッジ、MCCID という4つの聴覚障害者のための高等教育機関が集中している。筆者らはこのうちのミリアム・カレッジを除く3校を訪問した。以下に各機関の概要を報告する。

##### 4. 1 CAP カレッジ

CAP カレッジ（CAP College）は、保険会社が中心となるCAP（Comprehensive Annuity Plans）Family of Companies が運営している通信教育を中心とした教育機関である。マカティ地区のビジネス街の一画に位置したオフィスビルの中にラーニングセンターがある。聾者が教育を受ける School for the Deaf は他のコースと異なり、通信教育ではなく、通学制の対面教育を主体とした教育が行われている。

設置されているコースには、2年制で準学士が取得できる情報工学（Associate in Arts in Information Technology: AAIT）、3年制で卒業証明が取得できる会計学（Diploma in Accounting）、4年制で理学士の学位が取得できる経営学（Bachelor of Science in Business Administration: BSBA）が通常の教育課程で、他の短期課程として修了証書がもらえるコンピュータ保守管理（Certificate in Computer Preventive Maintenance）のコースが存在しているため、

学生の目的や学力レベルに合わせた教育が行える体制が用意されている。

運営母体が通信教育を行っているため、聴覚障害者に対する教育でもプリント教材を効果的に活用した授業がなされている。今回の訪問ではいくつかの英語のクラスを参観したが、その授業においても講義の最初にまずプリントが配られ、そのプリントに対して講義が進められていた。また、学力がある学生はさらに別のプリントに進めるようになっており、1つのクラスにおける学力差に対する対応がなされていた。

CAP カレッジでは他の高等教育機関と異なり、通常のエデュケーションを受けられなかった学生の受け入れを行っている。これはフィリピンが多くの島々から構成されているために、聴覚障害者を受け入れたり、対応したりすることができる小学校・中学校が近隣の島にもなかったりするために、通常の初等・中等教育を受けることができない聴覚障害者がいるという背景によるものである。CAP カレッジでは講義に通信教育で培ったプリント教材と Web 教育システムを活用することで学生個々の能力に対応した教育が実践されていた。

それを反映してか、参観した講義ではどれにおいても学生が活発に教員とやりとりをして、そのやりとりを通じて講義内容を理解しようとしていたことが印象に残った。これは学生側の目的意識の問題のみならず、学生が発した情報を教員にきちんと受け止めてもらえるという実感と信頼感によるところが大きいのではないかと思われる。

##### 4. 2 MCCID

MCCID（Manila Christian Computer Institute for the Deaf）は大学ではなく、いわゆる専門学校である。1993年にエスポーサ・ファミリー（Remberto C. Esposa Family）によって、聴覚障害者のための私立の特別訓練専門学校とし



図3 CAP カレッジの英語の授業



図4 CAP カレッジの歓迎会

てマニラ市に設立された。創設以来すでに 150 人以上が卒業し、そのほとんどが有給の仕事に従事している。運営は、キリスト教精神にもとづく設立者のファミリーによってなされ、慈善事業による基金や、寄付金、多様な奨学金などによって運営されている。

MCCID は、聴覚障害者が、ほかの一般市民と同様に、仕事や教育その他の事に挑戦し、競争する機会を得られるように支援することを目的として、コンピュータを駆使するスキルや、実際に生計を立てていけるような教育を受けられる専門学校として創設された。この専門学校のコースは、卒業証明 (diploma) を授与する 3 年間の 2 つのコース、単位取得証明 (certificate) を授与する 1 年間のコースおよびその他の 6 ヶ月の履修コースからなっている。

芸術及びコンピュータデザイン技術コース (Arts and Computer Design Technology) は、聴覚障害者対象の 3 年間のコース、前後期制で、各期に約 20 から 23 単位の授業があり、最終期に企業実習が 6 単位あり、卒業証明が取得できる。卒業後は、広告、印刷、レイアウト、グラフィックなどのアーティスト、官庁職員、一般事務員、ウェブデザイン、コンピュータオペレーター、ネットワーク技術者、データ入力・操作員、起業者等を目指して教育をしている。2003～2004 年度の学生数は 46 名である。

ビジネス技術コース (Business Technology) は、聴覚障害者対象の 3 年間のコース、前後期制で、各期に約 20 から 21 単位の授業、企業実習が最終期に 6 単位あり、卒業証明が取得できる。卒業後は会計事務員、簿記・給料支払記録事務員、一般事務員、ウェブデザイン、コンピュータオペレーター、ネットワーク技術者、データ入力・操作員、起業者等を目指して教育をしている。2003～2004 年度の学生数は 45 名である。

手話及び通訳コース (Sign Language and Interpreting) は、1 年間のコースで、前期後期で各 15 単位、実習 200

時間 6 単位で単位取得証明が取得できる。聴者が対象であり、卒業後は、会社、王宮、病院などの通訳、聾学校のトレーナー、個人通訳、聾学校教師、アメリカやカナダにおける聾者のための教師または通訳等を目指して教育をしている。2003～2004 年度の学生数は 10 名である。

このほかに、聾者・聴者両方を対象とした 6 ヶ月間のコンピュータソフトウェア技術コース (Computer Software Operation Technology) がある。開講授業科目は、コンピュータソフトウェア関連科目、インターネット・ウェブ・E コマース関連科目、コンピュータキーボード訓練科目、コンピュータハードウェア関連科目、アート・コンピュータデザイン関連科目、コミュニケーションスキル関連科目、ビジネス組織・管理関係科目、キリスト教倫理関連科目、数学、手話・デフカルチャー関連科目、体育その他などである。学校スタッフは 13 人 (うち 3 人には事務関係) である。

また、MCCID は聾者のための「TESDA (政府の技術教育・職能開発局) 市民サービス試験」(この試験に合格すると政府で働けるライセンスを得られる) を実施し、20 人以上の卒業生が政府のオフィスで働いている実績をもっている。

#### 4. 3 デラサール大学セント・ベニルデ校 聾教育及び応用研究学部 (SDEAS)

マニラにあるデラサール大学 (De La Salle University) は比較的裕福な家庭の子女が通うキリスト教系の私立総合大学で、そのカレッジの一つ、セント・ベニルデ校 (College of Saint Benilde:CSB) の中に聾教育・応用研究学部 (School of Deaf Education and Applied Study: SDEAS) がある。

アメリカのロチェスター工科大学の中に NTID (ナショナル聾工科大学) が設置されているのと似た形態である。CSB には約 5000～6000 人の一般学生がおり、図書館や体育館などは一緒に使っていて、聞こえる学生との交流



図5 MCCID の学生たち



図6 セント・ベニルデ・カレッジの副学長と

は容易に行える環境となっている。しかしながら、聾学生が聞こえる一般学生と同席して同じクラスで受講するメインストリームの体制はとっていない。

CSB における聾者の受け入れは 1991 年に聾の学生のための会計コースが開設されたときに始まる。1996 年に特殊教育学部から聾教育が独立し、2000 年からコンピュータ教育に重点を置く現在の SDEAS の体制になった。

SDEAS のコースとしては、応用聴覚障害学の学士コースのみで、マルチメディア・アートとビジネス起業学の 2 つの専攻に分かれている。学生数は、1 つの専攻 15 人で、2 つの専攻で 1 学年 30 人、4 学年合わせて約 120 人の学生が在籍している。

この学部の特徴の一つは、手話技術の向上に力を入れていることであり、聾の教官を講師とする 3 つのレベルの手話の授業が開講されている。ほとんどの学生は聾学校出身者であり、手話ができるが、更に手話を磨くために、レベル(Ⅲ)または(Ⅳ)の授業を取る(レベル(Ⅲ)は、聞こえる教官の手話学習が主な目的)。この手話技術の向上が、英語の読み書き能力につながると考えられている。同時に課外活動にも力を入れ、それによってリーダーとしての能力、高い向上心、他の人を助けようとする高い使命感などを育てようとしている。

聾学生にとって、この大学の授業料はかなりの負担となるようで、80%の学生が何らかの形で奨学金(授業料の全額または半額相当)をもらっている。

教官のほとんどは修士の学位を取得した高度の経験を積んだ専門家である。25 人の教官の内 9 人が聴覚障害者であり、そのほとんどは、この CSB の卒業生である。SDEAS に来たときには手話があり良くできない聞こえる教員もいるが、上記の手話の授業に出て手話を磨いていく。訪問しての印象としては、聾文化や手話に高い評価を与えており、学生が自信をもって学んでいること



図7 SDEAS の学生によるダンス

が感じられた。また舞踏などは、レベルの高い本格的なもので、こうした課外活動などにも力を入れていることが伺えた。

CSB は、本学と共に、PEN インターナショナル(聴覚障害者国際大学連合)のメンバーであり、テレビ電話ネットワークが敷設されており、2004 年秋から学生・教官の交流もスタートした。また本学の英語の授業の中で、ここの学生と本学の学生との間でメールでの交流が進行している。今回の訪問を契機に、CSB との学生交流がスタートし、筆者 4 人のうち 3 人が学生や他の教員と共に、同じ年の 11 月に再び CSB を訪問する機会に恵まれた。2005 年 2 月には CSB の学生と教職員 15 名の筑波技術短期大学訪問が計画されている。

## 5. まとめ

メトロ・マニラにある 3 つの高等教育機関のスタッフは手話に堪能で、自国の聾文化を尊重していた。お互いの実情やレベルをよく知っており、入学する学生の奪い合いにはならないということである。今回訪問する機会のなかったミリアム・カレジは口話主義で手話は用いられず、他の 3 校とは一線を画しているようであった。

さまざまなスタイルをもつ高等教育機関が共存し、切磋琢磨する環境には活気があった。名門私立大学の中に置かれた学士コースのみの CSB の SDEAS、通信教育を主体とする教育機関の中に置かれた学士コースと専門学校的なコースを併設する CAP カレジ、学士コースを置かず、聾者単独の専門学校として機能する MCCID。これらの高等教育機関に共通していたことは、専門教育としてコンピュータ技術に力を入れていることと、手話学習のためのコースを持ち、一般市民の受講を可能にしていることである。授業においては、教員が手話に熟達しているために、学生との間にコミュニケーション・ギャップがなく、非常に活発なやりとりが交わされる中で理解が進んでいった。

幼少時から英語で教育を受けてきた聾者に、手話による英語の再教育が必要である、という点には矛盾が感じられたが、フィリピンの高等教育のありようは、日本の聴覚障害教育の高等教育のありかたを考える上で、参考にすべき点を色々と示してくれた。

短期間で 4 つの現地の教育機関を訪問できたのは、事前に情報を提供し、通訳を務めてくれた瀧澤亜紀氏に負うところが大きい。記して感謝の意を表する。

## 参考文献

[1] 渋谷英章：外来勢力主導の教育制度の形成—スベ

イン、アメリカ、日本，弘文堂「もっと知りたい  
フィリピン」 p.191-203,1995

- [2] 松藤みどり，萩田秋雄，大塚和彦：フィリピンに  
おける聴覚障害者の高等教育機関－デラサール大  
学を中心に－．日本特殊教育学会第42回大会発表  
論文集，p.187, 2004
- [3] Shinro Kusanagi, Yolanda T. Caplong, Emelita F.  
Arevalo: Educating the Hearing Impaired Principles and  
Methodology. Maeda Printing Co., Ltd. 1997
- [4] Special Education Division (2003年フィリピン教育省  
資料) 2004

## A Report on Deaf Education in the Philippines

Midori MATSUFUJI<sup>1)</sup> Akio HAGITA<sup>2)</sup> Hiroshi HASEGAWA<sup>3)</sup> Kazuhiko OTSUKA<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> Research Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired

<sup>2)</sup> Department of Architectural Engineering

<sup>3)</sup> Department of Information Science and Electronics - Information Science Course

<sup>4)</sup> Department of Information Science and Electronics - Electronics Engineering Course

**Abstract :** We visited the Philippines from January 25 to 30, 2004. There are four tertiary educational institutions for the deaf and a school for the deaf in the Metro Manila area in the Philippines. We visited three tertiary educational institutions for the deaf along with the National School for the Deaf and the Department of Education. We had a good opportunity to learn about the educational system in the Philippines. Here we report on what we saw and our impressions.